

大谷大学所蔵の近世京都図

PD学芸員

門 井 慶 介
(日本古代史)

2018年度夏季企画展「みやこの年中行事」において、近世京都の様子を描いた地図(京都図)に描かれる送り火の「い」について紹介したところ、幻の送り火として思いがけず注目された。現在「大文字」「妙」「法」「鳥居」「舟形」「左大文字」が五山の送り火としてよく知られているが、江戸時代にはほかにもいくつかあり、京都図では静原あたりに描かれる「い」も明治頃までは焚かれていたという。この送り火に注目して京都図を概観してみると、「い」「大文字」「妙」「法」「鳥居」「舟形」「左大文字」の描かれているもの、「大文字」だけが描かれているもの、「左大文字」だけが描かれていないもの、また送り火が一切描かれていないものなど、送り火の描かれ方からだけでも、京都図が様々な特徴をもっていることがうかがえる。



江戸時代の京都では、江戸や大坂に先駆けて町並などを描いた地図がいち早く刊行され、現在では、時代によって内容や形態が異なる数十種類が知られている。大谷大学博物館と図書館では2018年現在、こうした近世京都図を11点収蔵している(表参照)。なお、今回紹介する京都図のほかに、日本全国の地図や各国地図、京都の絵図の瓦版なども所蔵しているが、今回はそれらを除外した。大谷大学がどのような絵図類を所蔵しているかについては、各自大

谷大学図書館の第一目録から第三目録によって検索されたい。

京都図の分類やその歴史の詳細については、参考文献にあたっただきたいが、京都図は研究史上、①寛永18年(1641)までに刊行されたもの、②承応3年(1654)からの約30年間に刊行されたもの、③貞享3年(1686)から約80年間に刊行されたもの、④18世紀以降、京都の書肆林吉永の出版業が衰えてからの約60年間に刊行されたもの、⑤天保2年(1831)以後幕末までの間に刊行されたものの5期に区分されている。大谷大学の所蔵する京都図は表のとおり18世紀以降の刊記をもつものが多い。

【平安城東西南北町并之図】近世京都の町絵図のうち、古版図の一つ。洛中の町並を墨で黒く塗りつぶして表現する。表記される内容から以下の6種類に分類される。①洛中の町並のみ。②洛東・洛南の寺社が追加。③洛西の寺社と堀川を表現。④島原の傾城町が追記。⑤はじめて刊記が記される。⑥表題に「洛外」の二文字・四周に山・洛北の寺社などが追記される。大谷大学博物館所蔵のものには刊記がなく、島原の傾城町や東本願寺新屋敷地などが描かれていることから、④の分類にあたることわかる。

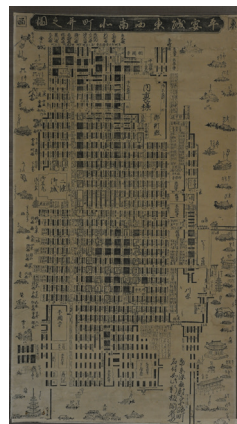
【京大絵図】初版は貞享3年(1686)で、以降元禄年間(1688-1703)から享保年間(1716-35)までの約60年間、断続的に刊行され続けた絵図。形態的には使用する紙幅が横広となり、洛中が詳細に記されるようになった。形態的にも記載される情報的にも京都図の転機となったもので、以降の京都図には、名所の沿革などの情報も取り入れられ、京都案内図として充実した内容を持つようになった。江戸時代の京都を代表する書肆の林吉永が刊行したもので、木版図

に手彩色を施している。大谷大学博物館所蔵のものは、元禄12年(1699)の刊記があり、本絵図が広く世に普及している時期のものであることがわかる。また林吉永が京都図を刊行していた時期には、観光案内図として携帯のできる中・小絵図も多く刊行されていた。「名所手引京図鑑綱目」は林吉永が刊行した中・小絵図の一種である。

【早見京絵図】 京都観光図として比較的時期の早いもので、以後広く流行する携帯版の絵図よりはやや大判となるもの。東を琵琶湖、西を高槻までとするなど洛外の情報を広く取り入れ、さらに道沿いなどの茶屋・宿屋の情報を示している。これらの情報は寺社をめぐる人びとのための情報である。一方で洛中の情報は最小限に省略されているといった特徴が見られる。

【改正京町絵図細見大成】 天保2年(1831)の刊記をもつもので、一枚刷りの絵図。出版者の竹原好兵衛の自信作であった。江戸時代後期の基本的な図として広く受容され、幕末までの30年以上も版を重ねた。洛中の通筋名、町名は町々小名まで記す。同一刊記でありながら異本も数種存在しているが、大谷大学博物館と図書館が所蔵するものはいずれも同じ版によるものと考えられる。

【新選京絵図】 嘉永5年(1852)の刊記が見られるもので、コンパクトな大きさの絵図。出版者のない「元治精選京都御絵図」がほぼ同じ内容をもつが、「新選京絵図」には御所の北側などに「薩州屋敷」などが描かれていないことから元治元年に刊行された際に改正されたことが



「平安城東西南北町並之図」

わかる。

以上、大谷大学博物館・図書館の所蔵する京都図を簡単に紹介してきたが、いずれも地図の刊行にあたり画期となったものであることが多い。京都図は江戸時代を通じて、様々な目的に沿って内容や形態を変えて刊行されてきた。ほぼ同時期の絵図でも、内容には大きな違いがあることがある。機会があれば、ぜひじっくり閲覧して京都図の奥深さを感じていただきたい。

〈参考文献〉

宇野日出生「京の火祭り」(<http://www.kyobunka.or.jp/kaiho/index2.html>)

大塚隆『京都図総目録』(日本書誌学大系18、青裳堂、1981年)

大塚隆編『慶長昭和京都地図集成』(柏書房、1994年)

小椋純一『植生からよむ日本人のくらし』(雄山閣出版、1996年)

金田章裕「近世京都図の特性」(『静修』38-3、2001年)

矢守一彦『都市図の歴史・日本篇』(講談社、1974年)

	資料名称	年代	形態	員数	所蔵
1	平安城東西南北町並之図	17世紀	紙本木版・軸装	1幅	博物館
2	京大絵図	元禄12年(1699)	紙本木版淡彩・継紙	1舗	博物館
3	名所手引京図鑑綱目	宝暦4年(1754)	紙本木版・継紙	1舗	博物館
4	早見京絵図	天明7年(1787)	紙本木版・継紙	1舗	博物館
5	改正京町絵図細見大成	天保2年(1831)	紙本木版・継紙	1舗	図書館
6	改正京町絵図細見大成	天保2年(1831)	紙本木版・継紙	1舗	博物館
7	新選京絵図	嘉永5年(1852)	紙本木版多色刷・継紙	1舗	図書館
8	元治精選京都御絵図	元治元年(1864)	紙本木版多色刷・継紙	1舗	博物館
9	皇都細見図	元治元年(1864)	紙本木版多色刷・継紙	1舗	博物館
10	大成京細見絵図	元治元年(1864)	紙本木版彩色・継紙	1舗	博物館
11	京都地図	元治元年(1864)	紙本木版多色刷・継紙	1舗	図書館